

～女性医師の子供だけを預かる保育園～ 仕事を可能にする長時間保育、 病児保育に利用者から高い満足

働く女性医師の仕事と育児の両立支援を目的に、女性医師の子供だけを預かる保育園が東京・新宿区内にオープンして約5か月。まだ定員には満たないが、その存在が次第に知られるようになって少しずつ園児が増え、元気に遊ぶ子供たちの声が響いている。長時間保育、病児保育など多くの特徴を備えており、子供を預けている女性医師の満足度はすこぶる高い。



池田美智子氏

ざるをえない女性医師が少ないことに、昔も今も変わりはない。働き続けたいという意思のある後輩の女性医師を少しでも応援したいという気持ちから、女性医師の労働の実態に即した保育園を立ち上げた」

同時に、同氏は「小さくてもこうした輪が広がっていくことを願うが、並行して医療現場の労働環境の改善がなされる必要がある。女性に限らず、勤務医の労働実態はあまりに過酷すぎる。今の状況は、医療を受ける側の国民にとっても望ましい形とは言えない」と指摘する。

「女性医師の労働実態に 即した保育園を」

同園の名称は「Dr. MOM Nursery School」。東京・東中野で耳鼻咽喉科クリニックを開業する池田美智子氏が開設した。「本来は一個人が成すべき事業ではないと思うが…」と前置きしつつ、同氏は開設の理由を次のように話す。

「自身2児の育児経験がある。夫の両親と同居で、義父母の目の届くところで家政婦さんに子供の面倒を見てもらった。私の場合は恵まれていたが、親の援助はだれもが受けられるわけではない。出産後も仕事を続けたいと願いながら、育児との両立が困難なために医療の第1線を離れ

保育時間は13時間と長く 看護師が常勤

同園ではゼロ歳児から5歳児までを預かる(定員30人)。特徴の1つは、女性医師の労働形態を考慮した長時間保育。1日13時間(朝7時～夜8時)保育で、突発的ニーズにも対応できるように夜10時までの延長も可能だ。週6日(月～土曜日、祝日を除く)をはじめいくつかのコースがあるほか、一時保育も行っている。

看護師が常勤していることも大きな特徴だ。通常の保育園では朝から38℃の発熱があると預けられないが、同園では伝染性疾患でなければ預かるし、保育中の発熱にも対応可能で、与薬もできる。近くの小児科医



室内は壁や仕切を少なくし子供たちが思いきり走れるようになっている

と提携している点も安心と言える。

保育と幼児教育を一元化

3歳児以上の園児に対しては、幼稚園教諭による幼児教育を行う。これにより、就学までの保育と幼児教育の一元化が可能となる。また、幼児教育の充実を目的に、英語やリズムなどの特別カリキュラムも用意されている。

現在のスタッフは、認可保育園長歴約40年の施設長を含む保育士4人、前出の看護師と幼稚園教諭、それに管理栄養士1人の計7人。対象を女性医師の子供に限定しているため認可保育園ではないが、すべての時間帯において児童福祉法の職員配置基準数を満たしている。保育園はビルの1フロア全部を占め80坪と広く、採光面積や非難通路など施設的にも基準をクリアしている。

「安心して預けられることで 仕事が続けられる」

入園第1号は最近1歳になった女

児。母親(30歳代)は消化器内科医で都内の病院に勤務している。ふだんの送り迎えは母親だが、たまたま迎えに来たという父親(医師)は「医師の仕事をよく理解してくれているので、子供を預ける側としては非常に

利便性が高い。幼児教育にも期待している。週6日朝から夜まで預けてくれることを考えると、費用も十二分に納得している」と話す。

出産後2年間休職し、最近、大病院へ復帰したという産婦人科医(30歳代)は2歳の男児を週5日預けている。「長時間保育と病児保育がある安心感を基準に選んだ」。3歳の男児を週3回預けている産婦人科医(30歳代)も、安心感を強調する。他の保育所に預けていた経験から、「安心して預けられることが仕事を続けるうえで一番重要なポイント」と言う。

子供の食物アレルギーに対応してくれる施設がなかったため職場復帰を断念し、現在は透析クリニックでアルバイトをしている腎臓内科医(20歳代)は、1歳8か月の男児を週1回預けている。「看護師と管理栄養士がいて、食物アレルギーに対応してくれる。施設の清潔感も気に入った。すごく満足している」と話している。